

ネギ白絹病

1 病原菌の特徴

- (1)ネギ白絹病は土壌中に生息する糸状菌(カビ)が原因で起こる病気で、埼玉県内では広域に発生しており、安定生産をおびやかす土壌病害として知られています。
- (2)この病原菌はネギの他、トマト、ナス、ピーマン、キュウリ、ウリ、メロン、スイカ、カボチャ、タマネギ、ニンジンなど多くの作物に病原性があります。
- (3)本菌は被害作物の地際部付近に繁殖した菌糸上に、淡褐色のナタネ種子状の菌核という組織を形成し、この菌核が土壌中で越冬し、翌年発芽して菌糸を伸ばし伝染します。この菌核は土壌の浅いところで5～6年間生存し、本菌に感染する作物を連作すると菌の密度が高まって被害はますます増加します。

2 被害の様子

本病は株元の地際部付近に発生し、はじめ葉鞘部分が淡褐色の水浸状になり、葉鞘や周辺の地表面に白色で絹糸状の菌糸を生じ、さらにこの菌糸上に淡褐色球形の菌核を生じます。病気が進行すると被害を受けた部分は、褐変腐敗して、下葉から黄化したり株全体が萎凋します。激発すると地際部から腐敗し、倒伏します。



写真1 発病株の症状



写真2 地際部に形成された菌核



写真3 菌核の拡大写真

3 発生について

(1) 発生条件

夏期の高温、多湿条件で発生が助長されるため、夏から初秋にかけて降雨が多く、土壌湿度が高いと多発します。とくに乾燥状態のあとに過湿状態が続くと激増します。また、排水不良のほ場でも多発しやすい傾向があります。

病原菌の生育適温は 30～35℃ですが、やや低めの 25℃前後で最もよく発病します。発生ほ場では、敷きわらなどの未分解有機物を施用すると、そこで病原菌が増殖し、さらに土壌湿度も高くなって多発の原因となります。

(2) 発生消長

土壌中の菌核は、5月に入ると徐々に発芽して、近隣のネギに感染し、6月中旬ころから発生が認められるようになります。まん延は梅雨末期から8月下旬にかけて最も進行し、10月末ころにはほぼ終息します。

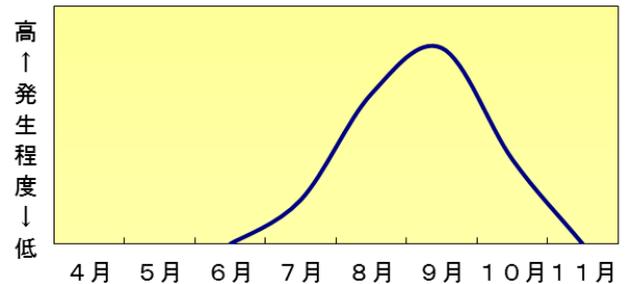


図 1 ネギ白絹病の発生消長

4 防除時期と防除方法

- (1) 発生ほ場では連作を避け、イネ科作物などを栽培しましょう。
- (2) 菌核は水に弱いので、可能なほ場は水田転換を行いましょう。菌核は 20 日間以上湛水すると死滅します。
- (3) 発生ほ場では、植付けの前年の秋に天地返しを行って、菌核を土中深く埋没し、死滅させます。本菌は、ほ場の浅いところで繁殖しますが、10cm 以上深いところではほとんど生育せず、発病にも関係しません。
- (4) 排水の悪いほ場では、排水対策を実施しましょう。
- (5) 密植と深植え及び過度の土寄せは発病を助長させるので避けましょう。
- (6) 生わら等の未熟有機物の施用は、病原菌を増殖させ、発病を助長させるので避けましょう。やむを得ず施用する場合は、定植の1ヶ月以上前に施用して、十分に腐熟させましょう。
- (7) 早期発見につとめ、発病株は菌核が作られる前に除去しましょう。

薬剤防除を実施する場合は、

- 最終有効年月内の農薬を使用し、ラベルに記載されている適用作物、使用時期、使用方法等を必ず確認してください。
- 適切な薬剤を選択し、病害虫が抵抗性を獲得しないように、同一系統薬剤の連続使用を避けてください。
- 農薬を散布する際は飛散しないよう対策を講じてください。

- 発行 平成28年2月 埼玉県農産物安全課、一般社団法人埼玉県植物防疫協会
- 問合せ先(原稿執筆)

埼玉県農業技術研究センター生産環境・安全管理研究担当 TEL048-536-0409
埼玉県病害虫防除所 TEL048-539-0661



©埼玉県 2005

彩の国埼玉県